
サロメ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サロメ

【Nコード】

N7269F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ユダヤの王女サロメ。まだ何も知らぬが恐ろしいまでに妖しい美貌を持つ彼女は井戸の中に身を潜める預言者ヨカナンを意識し彼のやつれているが端整で逞しい姿を見てあるものを感じるのだった。それは何か。オスカー・ワイルドが戯曲にしリヒャルト・シュトラウスがオペラにしたものを小説にしてみました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 情念

静かな月夜の下今宵も宴が繰り広げられていた。この時代ヘブライの者達は奸智に長け卑しいヘロデの下圧制に虐げられていた。彼はローマにおもねり自信だけが快樂と榮華の中にあつた。それに従うのは誇りをなくした者達ばかりでありシオンの民は既に滅亡の退廃的な空氣の中にあつた。

そのヘロデ王の宮殿からは夜通し灯りと歌と笑い声が聞こえる。守衛の兵士達はそれを外から見守っていた。

「なあ」

うちの一人が同僚に声をかけてきた。ローマ風の鎧にグラディウス、槍を備え髭も剃っている。ヘブライの者達は髭を剃らないというのにだ。彼等はそのことに不満を抱いていたが口に出すことはできなかつた。王自らそうしているからである。

「やけに月が大きくないか？」

「そうだな」

同僚の兵士も彼と同じ姿だ。その姿で応える。

「それに白い。まるで」

「まるで？」

「王女様のようだ」

「サロメ様のようにか」

「ああ。何か綺麗でそれで」

彼は言う。

「怖いな」

「そうだな。吸い込まれてしまいそうだ」

同僚は彼の言葉に頷く。

「サロメ様を見ているとそうなる。不思議なことにな」

「あれはどうしてなんだ？」

彼は仲間に問う。

「サロメ様は確かに美しい。しかし」

「待て」

ここで黒い髪をローマ風に束ね黄金と白のヴェールに身を包んだ少女が現われた。小柄で華奢な身体に白い雪の如き肌に黒く大きな目と小さく整った紅の唇。睫毛も長くあまりにも綺麗だ。だがそれと同時に妖艶であり見ているだけで引き込まれてしまいそうだ。彼女こそがサロメ、このヘブライの王女である。

前王と妃の間に生まれた。だが前王が死にその弟であるヘロデが王となり妃であったサロメの母を妻とした。その為彼女は今でも王女となっているのだ。だが王の実子から養子になっていたのである。

「人形のような」

最初に月を指差した黒い髪の兵士が言った。

「人形か」

「そうだ。確かに美しい。しかしその美は」

「この世のものではないか」

「そうだ。そう思えないか？」

「確かに」

同僚の兵士達はその言葉に頷く。ここで宮殿から突如として怒鳴り声が聞こえてきた。

「またか」

兵士達はそれを聞いて表情を変えずに述べる。

「相も変わらずだな」

「全くだ」

呆れた声であった。よく聞けば天使がどうかいるかないかといった話であった。

この時代ヘブライの宗教論議は完全にする為の論議になっていた。建設性はなく完全に形骸化し、空虚なものになっていた。その中で彼等は道化のように議論をしているだけであったのである。

「またか」

宮殿の外で青いトーガを着た茶色の髪に青い目の若者が宮殿の方を見て呟く。彫の薄い顔を見てみると彼がローマの者ではないとわかる。シリアの者で名前をナラボートという。

「いつもいつも。好きなことだ」

「おお、ナラボート殿」

「どうされたのですか？」

兵士達は彼に気付いて声をかけてきた。

「いえ、涼みに来たのですが」

そうは言いながらもサロメを見ている。

「王女もおられるんですね」

「ええ」

ナラボートは答える。答えはするがその声は空ろであった。

「ですが」

「ですが？」

「あの方は何と青い顔をしておられるのだ」

彼はサロメを見て述べた。

「まるでこの月のように」

「今の月が！？」

「いや、そういえば」

兵士達は月を見上げる。見ればそうも見える。

「そうかもな」

「ですがナラボート殿」

彼等はナラボートの暗い顔を見てまた彼に声をかけた。

「月は元来不吉なもの」

「ですから」

「しかし」

彼は兵士達の言葉を遮ってまた言う。

「見ないではいられないのだ」

「月をですね」

「そう、月をだ」

その月は天にある月ではない。地にある月である。

「私は見ていたいのだ。何時までも」

「無駄だ」

ここで地の底から声が響き渡ってきた。

「！？この声は」

「あつ、今の声は」

「その」

兵士達はナラボートが今の声に顔を見回すのを見てバツの悪い顔を見せてきた。そのうえで述べる。

「そのですね」

「今の御言葉は」

「御言葉」

ナラボートは彼等の態度が恭しいのに気付いた。そこでまた声が聞こえてきた。

「私の後に聖なる方がお生まれになられる。その方が来られる時には不毛の大地は喜び百合のように咲く」

「奇跡か」

ナラボートはその言葉を聞いて言った。

「それは」

第一幕その二

「目の見えない者は目が見えるようになり耳の聞こえない者は聞こえるようになる。赤子もまた竜や獅子に負けないようになるであろう」

「今の言葉は」

「聖なる方の御言葉です」

黒い髪 of 兵士が彼に答えた。

「聖なる方の」

「そうです。その方の」

「預言者なのです」

同僚の兵士も述べてきた。

「私が日々の食事を持って行くと礼を言われ」

「非常に優しい言葉をかけて下さるのです」

「その方の名は」

ナラボートは彼等に問う。

「何といわれるのだ」

「ヨカナン」

彼等はそう答えた。

「それがその方の御名前です」

「ヨカナン殿ですか。何か神々しい響きのある御名前ですね」

「ええ」

兵士達はその言葉に頷く。

「全くです」

「元は荒地から来られた方で」

「荒地から」

「そうです、ヘブライの荒地から」

シオンの地は決して豊かな地ではない。荒涼とした場所である。だからここそこではヤハウエの神が現われたのだ。絶対的な指導者、

導くべき存在が彼等に必要だったからだ。

それがユダヤ教の興りである。しかし今ではそれが形骸化し、先程の宮殿から聞こえてくるような下らない論争になってしまっているのだ。

「蝗と野蜜を糧として生きてこられ、駱駝の皮の粗末な服を着ておられたのです」

「そうだったのか」

「ええ」

黒髪の兵士はそうナラポートに述べた。

「おわかりでしょうか。凄い方なのです」

「そのような方だったとは」

「驚かれたようですね」

「驚かない筈がない」

そう兵士達に返した。

「できれば。御会いたいのだが」

「残念ですがそれは無理でしょう」

同僚の兵士がナラポートに述べてきた。

「それは何故だ？」

「陛下が御許しにならないからです」

黒髪の兵士はそうナラポートに説明する。

「ですから」

「そうなのか」

「申し訳ありません」

「いや、いい」

それはよしとした。しかしまた聞いた。

「ただ。何処におられるのだ？」

「井戸の中です」

兵士達は答えた。

「井戸の中に」

「そうです。そこにおられるのです」

「そこに誰がいるの？」

この話はサロメに聞かれていた。彼女は兵士達とナラボートの方にやって来て声をかけてきたのだ。

「井戸の中に」

「王女様」

「誰なの、それは」

「いえ、その」

「言って」

じつと兵士達の目を見て問う。その眼差しには魔性がある。兵士達はその目を見ると逆らえなくなってしまうたのであった。まるで魔法にかけられたかのように。

「いいわね」

「は、はい」

「それでしたら」

「悪いわね。無理なお願いをして」

「いえ、それはいいです」

兵士達は慌ててサロメを宥めてきた。

「ただ」

「ただ。何かしら」

「どうしてこちらへ」

「宴には」

「楽しくなくて」

サロメはその妖しい目に憂いを含ませて答えてきた。

「だから」

「そうだったんですか」

「そうよ。御義父様はね」

彼女は言う。

「私を変な目で見ているのよ。だから」

実はヘロデはサロメに対してよからぬ想いを抱いていたのである。彼女もそれに気付いている。だからそれを嫌がって離れたのである。

そうした事情があつたのだ。

第一幕その三

「それに」

「それに？」

「私は騒がしいのは好きではないし」

表情にも憂いを帯びさせてきた。陰のある美貌になった。

「ああした議論もギリシア風のお化粧も好きではないのよ」

「ローマのお話は」

「それもよ」

そう兵士に返す。

「ローマのことは好きではないのよ。ああした贅沢も」

「そうなのですか」

「そうなの。それにエジプト人もね」

サロメは言う。

「あの人達のお洒落というのも。何もかもが」

「はあ」

「それよりもお月様の方がいいわ」

上を見上げる。そこに白い月があつた。

「綺麗だと思わない？」

月を見上げて兵士達とナラポートに問う。彼等もサロメに続く。

「銀貨みたいで。お花にも見えるわよね」

「そうですね」

「本当に。ただ」

彼等はサロメの言葉に頷く。頷いてから述べる。

「ただ？」

「不吉なものも感じます」

同僚の、茶色の髪 of 兵士は言う。

「特に今日の月には」

「そうかしら」

だがサロメはその言葉に首を傾げさせる。

「私はそうは思わないけれど」

「しかし王女様」

「やはり」

「遂に時は来た」

ここで声がする。サロメはその声の方に顔を向けた。

「主が来られる時が」

「あの声は？」

声の方に顔を向けながら兵士達に問う。

「誰の声なの？」

「預言者様の声です」

黒髪の兵士が答える。

「預言者というと」

「申し上げにくいのですが」

茶髪の兵士が答える。

「先程の話なのですが」

「私が尋ねた話ね」

「はい」

兵士達はまた答える。

「というところあの声は御義父様の言っておられた」

「そうです。ですから」

「御近付きには」

そう言つて彼等はサロメを止めようとする。怪訝な顔で彼女の顔を見ていた。

「母上はあの方を嫌つておられたわね」

サロメはふと思ひ出したように述べた。

「そういえば」

「ええ」

「それもありますし」

兵士達とはにかく彼女を止めようとする。サロメの前に立って

る。

「ですからやはり」

「お聞きになつて頂ければ」

「一つ聞きたいことがあるの」

しかしサロメはそんな彼等にまた問う。

「その預言者は幾つなのかしら」

「幾つですか」

「そう。若いの？それとも」

「若い男です」

黒髪の男が答えた。

「それは確かです。ですが」

「何かあるの？」

「ございます。荒野にいた為その御身体は」

「身体は」

サロメは何故か身体という言葉に刺激を感じた。ふと顔が上がる。

「どうなっているの？」

「遅しいものになっています」

「若くて遅しい男だというのね」

「そうです」

「何故かしら。それを聞くと」

声が上ずっていた。その声でまた言う。

「会いたいわ」

「いえ、それはなりません」

兵士達はそれをすぐに否定してきた。またしてもサロメの前に立つ。

「どうかここは」

「パレスチナの民よ」

またヨカナンの声がした。

「御前達を打ち据えた鞭が折れたとしても終わりではない。蛇の種から魔竜が現われ」

「また」

サロメはその声に反応して顔を上げる。

「あの声が」

「その魔竜達が御前達を襲うだろう」

「不思議な声」

サロメはその声を聞いて述べる。

「またその声が私にかけられたら」

「まずい」

「これは」

兵士達はサロメの様子を見て危ういものを察した。

第一幕その四

「お戻り下さい」

「そうですね、ナラボート殿」

「そうですね」

相槌を求められてそれに応える。この場合彼は兵士達の同盟者になつていた。

「やはりここは」

「井戸は確か」

しかしサロメは彼等の言葉を聞いていない。記憶と目に入るものを辿りながら井戸を探す。そうしてそれを見つけたのであった。

「あそこだったわね」

「さあ、王女様」

兵士達はまたサロメに声をかけてきた。

「ここはお下がりを」

「宮殿に」

「連れて来て」

しかしサロメは言う。

「ヨカナーンを。いいわね」

「ですが」

兵士達は戸惑う。しかしそこで彼女は兵士達の目をじつと見据えてきたのであった。

「うっ」

「いいわね」

サロメはまた彼等に言う。言葉が加わってはもう逆らうことはできなかった。

「わかりました」

「それでは」

魔性には逆らうことができなかった。こうして彼等は井戸に向か

うのであった。

その間にナラボートがサロメの前に来た。そうして語る。

「王女様、どうしてもなのですか」

「ええ」

サロメは妖しく笑ってナラボートに答える。

「どうしてもね。わかるわね」

「しかし」

ナラボートはサロメに対して述べる。

「やはりここは」

「いえ、私は決めたのよ」

しかしサロメの心は変わらない。ナラボートの言葉も彼女には届かない。

「だから」

「胸騒ぎがします」

ナラボートは不吉なものを恐れる顔でサロメに述べた。

「このままですと恐ろしいことが」

「それでもいいわ」

それでもサロメは言うのであった。

「どうなってもね」

「貴女がどうなってもですか」

「構わないわ。あの声の主の姿が見えるのならね」

「どうしてもですか」

「そう、どうしても」

サロメは言う。

「あの方を見たいわ」

「そうなのですか」

ナラボートはそれを聞いて俯く。遂に諦めたのであった。

「貴方には花をあげるわ」

サロメは言う。

「それか微笑みか。どれがいいのかしら」

「どれもいりませぬ」

ナラボートはサロメから少し顔を離して述べた。

「そのどれも」

「無欲なのね、貴方は」

「欲はあります」

しかしナラボートはその言葉に首を横に振る。

「ですが」

「ならその欲を実現させればいいのよ」

サロメの言葉は彼女の考えそのものであった。

「違つかしら」

「それができればそれに越したことはないでしょう」

そうサロメに述べる。

「ですが」

「私はするわ」

サロメは彼を見て言った。

「何があるうともね」

「そうなのですか」

「王女様」

ここで兵士達が戻ってきた。

「お連れしました」

「有り難う」

サロメは彼等の方を振り向いて礼を述べた。

「御義父様には私から申し上げておくわ」

「ですが」

兵士達が恐れているのは王についてではなかった。

「あの方に御会いするのは」

「やはり」

「貴方達が気にすることではないわ」

サロメは彼等に告げる。

「だから。安心して」

「そうでしたら」

「ではヨカナン殿」

二人は後ろにいる兵士達に顔を向けてきた。

「こちらです」

「王女様が」

「王ではないのか」

そこにいたのは背が高くみすばらしい黒い服を着た男であった。

髪も髭も切らず伸ばしていた。それはヘブライの風習であった。その目は深い知性を宿り激しい光を放っていた。知性はあってもそれは激しい知性であった。顔はみすばらしい中にも品性があり卑しい者ではないことを示している。しかしそれ以上に彼が激しい者であることが出ていた。

「あの罪深い王ではないのか」

「御義父様なのね」

サロメはその言葉を聞いてすぐにわかった。

第一幕その五

「それは」

「あの王妃でもないのか」

彼は今度は王妃について述べていた。

「夫を殺した男と寝て様々な男と交わり贅沢の限りを尽くすあの女でもないのか」

「御母様ね」

今度も誰なのかわかった。

「いずれ裁きがある。それを教えてやろうぞ」

「貴方がヨカナンなのね」

「むっ」

ヨカナンはサロメに気付いた。

「御前は誰だ」

「何という鋭い光」

サロメはヨカナンの目を見ていた。その目を見ながら恍惚としていた。

「その光が今私に」

「私を見ているのか」

「黒い、それでいて輝く瞳」

ヨカナンの目をじっと見詰めている。恍惚としたまま。

「気まぐれな月に掻き乱された黒い湖みたいな、それでいて松明よりも赤く輝いているわ」

「王女様、やはり」

兵士達とナラボートはまたサロメに声をかける。そこに狂気を感じていたからだ。

「ここはお下がりを」

「ヨカナン殿も。戻られて」

「何という身体」

だがサロメは聞かない。今度はヨカナーンの身体を見ていた。

「瘦せていて白くてまるで象牙の像のよう。月のように淨らかで
「危ないですぞ」

ナラボートはその言葉を聞いてさらに危惧を感じた。

「このままでは」

「はい、やはり」

「ですから王女様」

「もつと側に」

サロメは夢遊病患者のようにヨカナーンの方に向かう。

「そしてあの人を」

「誰だ、御前は」

ヨカナーンはサロメに問う。

「何故私を見ているのだ？」

「私はサロメ」

サロメは名乗った。

「その目で何を見ているのだ。黒と黄金の混ざったその目で」

「サロメというのよ。ヘロデアの娘」

「あの女の娘だというのか」

ヨカナーンはその言葉を聞いて顔を顰めさせてきた。

「あの女の」

「それがどうしたというの？」

「不浄だ」

彼は言った。

「御前は不浄な女の娘だ。御前の母の罪はあくまで重い」

「お止め下さい、ヨカナーン様」

兵士達が彼を止める。

「その御言葉を」

「ですから」

「いえ」

しかしサロメがここで言う。

「言つて。もつと」

「駄目です」

彼女にはナラボートが止める。

「宮殿に」

「もつと言つて」

だがサロメはヨカナーンにさらに寄ろうとする。うつとりとさえして声をかける。

「私に。その力強く低い声を」

「近寄るな。御前が求めるのは私ではない」

「私ではない」

「そう、人の子だ」

彼は厳かな声で言う。

「人の子こそを求めるべきなのだ」

「誰なの、それは」

サロメは彼に問う。

「その人の子というのは」

「間も無く現われる」

イエスのことだ。だがそれを知る者はまだ僅かであつた。視つてはいても彼とヘブライの運命は定まっていたことであるが。

「そう、間も無く」

「一体誰が」

「裁きを」

ヨカナーンはまた言う。

「裁きの天使を。今ここに」

「裁きの天子だというのね」

「不浄な罪を犯し続けるヘブライの者達を」

「ヨカナーン、その白い肌」

サロメはその言葉をよそにヨカナーンに声をかけた。

「その白い肌を私に。そして」

「下がれ」

だが彼はサロメを拒む。

「私は女には関心はない」

「何故なの？」

「私はそれ以外を見て生きているからだ」

そうサロメに告げる。

「だからだ」

「妙なことを言うわね」

その言葉は彼女にはわからないものであった。

「女を見ないなんて。しかも私を」

サロメは幼い頃から美貌を誇っていた。だからヨカナンが自分を見ないことが信じられなかったのだ。だから余計に彼に問う。

「その光の中にはなかった白い肌もエドムの葡萄の房のような髪も、何という綺麗な髪」

ヨカナンに告げる。

「その髪も」

「触るな」

近寄ろうとするサロメを拒む。

「私に構うな」

「その茨の冠のような髪。紅のしっかりとした唇も。柰榴や薔薇よりも紅いのは何と逞しいの？そなたの唇は」

また恍惚としていた。その顔で言う。

「珊瑚や朱よりも。何と紅いの」

「紅い唇も私には関係ない」

彼はサロメから顔を背けた。

第一幕その六

「全ては神の御為に」

「神が何だというの？」

「愚かな」

そのサロメの言葉を言い捨てる。

「神を解せぬとは。一体何の為に生きているのか」

「王女様、ですから」

ナラボートはまた彼女の前に来た。

「下がって」

しかし彼を退ける。

「いいわね」

「ですが」

「ナラボート殿」

兵士達が首を横に振って彼に告げる。

「ここはもう」

「諦められた方が」

「しかしこの不吉な気配は」

それでもナラボートは留まろうとする。

「何としても」

「それでもです」

「ここは」

「どうしようもないのか」

「御覧下さい」

黒髪の兵士がサロメに目をやって彼に述べる。

「あの御様子を」

「王女様はもう」

「そうか。最早人の世界にはないのだな」

ナラボートは俯いてそう述べた。今それがわかった。

「それでは最早」

「去りましょう」

「人であらざる世界から」

ナラボート達は止むを得なくその場を後にした。しかしそこにはまだサロメがいた。今もじつとヨカナーンを見詰めている。

「さあ、口付けを」

そうヨカナーンに言う。

「その唇を」

「淫欲は全てを滅ぼす」

ヨカナーンはサロメを見ずにそう述べた。

「淫欲の罪を犯した女の娘、人を救うあの方を迎えよ。そうして御前は救われるのだ」

「救いが何だというの？」

サロメにとつては救いなぞはどうでもよかった。きつぱりとした声で語り首を横に振るのであった。そのうえでまたヨカナーンに問う。

「口付けを」

「愚かなことだ」

その言葉に言い捨てる。

「そうして身を滅ぼすというのか。ならそうするがいい」

サロメから目を離れたまま。ゆっくりと身体も離していく。

「何処へ行くの？」

「私が今までいた場所に」

そうサロメに告げる。

「それだけだ」

井戸に戻っていく。自分から再び闇の中へ入り姿を隠したのであった。

サロメはそんな彼をじつと見詰めていた。姿が見えなくなったがまだ彼を見ていた。

「きつと私は」

「王女様」

そこにナラボートが戻ってきた。兵士達も一緒である。

彼等は難しい顔をしている。その顔でサロメを見ていた。

「何かしら」

「宮殿においで下さいとのことですよ」

ナラボートはそうサロメに告げる。

「宜しいでしょうか」

「宮殿に」

サロメはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「そうです、宮殿に」

「ですから」

兵士達も彼女に告げる。

「元気がないと言って」

そう言っ行ってこうとはしない。

「今は」

「ですが陛下の御要望ですので」

茶髪の兵士がそう述べる。

「ですから」

「断れないのね」

サロメは不機嫌な顔で彼に問い返す。

「どうしても」

「たまにはおいでになれるのもいいかと思えます」

「ですから」

「仕方ないわね」

その言葉に不承不承ながら応えることにした。

「それじゃあ」

「はい」

「ではどうぞこちらに」

彼等はサロメを宮殿に導いていく。みらびやかな大きな部屋の中に様々な着飾った男や女が入り乱れ酒と馳走、ローマやエジプトの

その淫らな服に身を包んだ芸人や歌い手達が遊んでいる。淫らな曲に合わせて淫らな舞を舞い男達はそれを見て喝采を送っていた。

美食はあちこちに散乱し皆それを貪っている。美酒は美女の口から男達の口に注がれ淫猥な味を醸し出させている。その中央の二つの玉座にその中でも特別に着飾った初老の男女がいた。

第二幕その一

第二幕 恍惚

二人共整っているが品性が感じられない顔をしている。二人共冠を被っていることから王と王妃であることがわかる。王はヘロデ、好色で貪欲な王である。王妃はヘロデア、やはり好色で節度のない女であった。彼等はローマの贅沢を楽しみ民のことも神のことも考えない。そうした者達であった。

「よく戻ってきた」

ヘロデはサロメの姿を認めて顔を綻ばせてきた。彼女のと王の前に道は開いておりその左右に着飾りながらも腐敗した者達が惚けた顔で蹲っていた。

「何処に行つておつた？」

「月の下に」

サロメはそうヘロデ王に告げた。

「涼みに」

「左様か。それでは今度は宴を楽しむのじゃ」

そうサロメに告げる。

「よいな。これ」

左右の者に声をかける。

「サロメに酒を。そして馳走を」

「畏まりました」

「それでは」

側に控える者達がそれに応える。すぐに酒と馳走を持って来た。

「ささ、サロメよ」

王はまた彼女に声をかけた。

「そんな離れた場所におらずにな。もっと」

「陛下」

ここで彼の横にいる王妃がきつとした顔で声をかけてきた。

「何じゃ？」

「あまり見られぬように」

彼女はそう王に言ってきた。

「宜しいですね」

「別に見てはおらぬが」

そう述べて誤魔化しながら周りを見回す。窓の外の月に気付いた。

「見よ」

月を指差す。

「何かを探しているようじゃ」

「月がですか」

「そうじゃ。そうは見えぬか？」

「いえ」

王妃は王のその言葉を否定してきた。

「見えはしません」

「何故じゃ」

「月は月です」

冷たくそう述べた。

「違いますか？」

「風情がないのう。月が恋人を探して彷徨っているようだといふのに」

「詩的ではありません。しかしそれだけです」

王妃はまた述べた。

「それ以外の何でもありません」

「ローマでは詩が愛されておるぞ」

「それはよいことです」

しかしまだ王はまだ未練を残している。目を泳がせながらサロメを見るのであった。

「サロメよ」

「はい」

サロメは王に応える。その好色そうな目には気付いてはいるが、あえて言いはしない。受け流すだけであった。

「座るがよい。ナラボート殿」

客人扱いなので殿と呼んでいる。

「サロメに席を」

「わかりました」

ナラボートはそれに応える。応えながらサロメに顔を向けてきた。

「さあ、こちらへ」

「わかったわ」

サロメはそれに従い席につく。王はその彼女にまだ熱いねっとりとした目を向けながらまた王妃にとってはいささか面白くないことを述べるのであった。

「大きな音が聞こえるな」

「幻聴ではないですか？」

「いや、違う」

しかし王は王妃に対して言う。

「風の音、いや違うな」

言いながら何処か不吉なものも感じないではない。その中で述べる。

「羽ばたきかのう。天使……それも厳しい天使じゃ」

ヘブライの天使達は厳格であり容赦ない。自ら剣を手にして人を殺め世界を破壊していくのである。それはまるで破壊の化身である。

「聞こえぬか」

「聞こえませぬ」

王妃の言葉はやはり素っ気無い。

「それよりもサロメ」

今度は実の娘に声をかけた。

「疲れたであろう？」

彼女にあえて優しい言葉をかける。顔も穏やかなものにさせていた。

「だから。下がって休むがいい」

「待て」

だが王はそれを止める。

「まだ早い。疲れてはおらぬのではないのか？」

「いえ」

しかし王妃はそんな彼に平然と言い返す。彼に対しては澄ました顔になる。

「それは違います」

「違っているのはそなただ」

王も負けじと述べる。

「見よ。サロメは」

「御覧になられてはなりません」

「何故そう言う」

「陛下の御為です」

冷たい声で述べる。高山の氷のように冷たい声で。

「それだけです」

「疲れていればそれはそれですべきことがある」

そう言う側者に声をかけてきた。

第二幕その二

「果物を持って参れ」

「わかりました」

声をかけられた者はそれに応える。そして暫くして葡萄やオレングジが運ばれてきた。王はそれをサロメの前に置かせたうえでもた声をかけてきた。

「さあサロメ、食べるがいい」

「果物をですか」

「うむ、ここだな」

サロメが食べる姿を見るつもりだったのだ。

「その口でな。よいか」

「お腹がすいていません」

「何と」

王はそれを聞いて声をあげてきた。

「そんな筈が」

「まことでございます」

しかしサロメは述べる。

「ですから」

「そんな筈が。だが食べてみよ」

無理をして言ってきた。

「そなたの口でな。その紅く小さな口で」

「ですが」

「ほら、御覧なさい」

王妃は言う。

「サロメは疲れているのです。ですから」

「ううむ」

「時は来た」

ここでヨカナーンの声がした。

「いよいよ御子が来られるのだ」

「あの男ね」

王妃はその声の方に顔を向けて喉を浮かべてきた。

「忌々しい」

「そなたのことを言っているのではない」

王はそう言って妃を落ち着かせる。

「そうであろう？」

「いえ」

しかし王妃はその言葉に首を横に振る。

「言っていますわ、いつも」

「それはだな」

「私を忌まわしい淫猥な女だと。いつも言っていますわ」

「しかし」

「私は予言は信じておりませぬ」

きつとした声で言ってきた。

「未来のことは誰にもわかりませぬ。あの男は私に対して悪口を言っているだけなのです」

「聞き流せ」

王はそう述べる。

「よいな」

「貴方はあの男を恐れておられますね」

王妃は不機嫌な顔を今度は王に向けてきた。そのうえでまた言う。

「だからこそ」

「恐れてはいない」

そう返す。

「恐れてはな」

「嘘です」

「王は誰も恐れぬ」

「ではローマは」

王妃のその言葉に眉をピクリと動かしてきた。嫌な気配になって

いた。

「どうなのですか？」

「陛下は立派な御方じゃ」

ローマに膝を屈していることはヘブライの者にとって屈辱なのである。王妃はあえてそれを言葉に出して王を挑発してきたのだ。だが王はそれを何とか抑えて返してきたのだ。

「いえ」

だがここで中年の司祭の一人が王の前に出て来て申し上げてきた。

「陛下、それは違います」

「違うのか」

「はい、あの者はまやかしです」

彼は言う。

「神を最後に見たのは預言者エリアが最後です。ですから」

「その通りです」

別の若いヘブライ人も言ってきた。

「あの者が見たのは神の影だったのでしょう」

「いや、それはどうですか」

しかしそこで別の年老いた司祭が言う。

「神は決して姿を隠されはしないもの。神はあらゆるところにおられるもの」

「それは違いますな」

最初の司祭が述べてきた。

「貴方の仰ることは間違っておられます」

「どう違うのかのう」

年老いた司祭は中年の司祭に顔を顰めさせたまま問う。

「わしの言っていることが」

「神は我等のところだけにおられます。違いますか」

「そうですな」

別のやたらと長い髭のヘブライ人が述べる。

「神は」

「いや、それはどうかな」

しかしそれに中年の司祭が異を述べる。

「それは」

「違うというのか」

「はい、ですから」

「お止めなさい」

王妃は彼等の話を止めさせてきた。

第二幕その三

「これ以上話をしてもしつもの堂々巡りなのだから」
「ううむ」

王は王で難しい顔をしていた。王としてこの議論を無闇に止めさせるわけにはいかなかったのだ。ヘブライの者にとって神は何よりも重要なものであるからだ。

「預言もよいが」

彼は誰にも聞こえない声で呟く。

「その預言者も何人も出ておるしな。何かと難しい」

「その日は来たぞ」

またヨカナーンの声がする。

「御子の足音が山々に聞こえるぞ」

「御子とは何じゃ？」

「皇帝陛下のことでは？」

ナラボートは事情をよくわからないまま述べてきた。シリア人である彼にとってはそもそもヘブライ人達の神がどうしたその力がどうしたのといった議論はよくわからないものである。それ以上に御子といった存在は訳がわからないものであった。

「確か称号にそうしたものの一つが」

「左様か。いや」

だが王はここに今一つ引つ掛かるものを感じていた。

「違うのではないのか？」

「違いますか？」

「陛下はこのエルサレムへは来られぬ」

王はそう述べた。

「昨日親書を受け取ったがそれは」

「どうでしたか？」

「そんなことは書いてはいなかった」

「そうなのですか」

「うむ」

王は答える。

「それにじゃ。陛下は健康を害されていてここまでは来られぬし」

「それはないか」

「ではそれは」

またユダヤ人達が出て来た。

「やはりあの預言の救世主」

「まさか」

彼等は早速話に入る。

「あれは偽りでは」

「いや、偽りではない」

「左様、実際に預言に残されているではないか」

「その預言は誰のじゃ？」

「何処の馬の骨なのじゃ？」

彼等はまた口々に言い合う。

「しつかりと言え」

「誰なのじゃ」

「あの御方じゃ」

中の一人がここで言う。

「あの水を葡萄酒に変えられ手を乗せるだけで病を治されると話にある」

「治されるのは盲人では？」

また妙な議論に入っていく。

「天使と話されたのでは？」

「またはじまつたわ」

王妃はそんな彼等のやり取りを聞いてうんざりとした顔で溜息をつく。

「どうしてこうも」

「天使はおられる。だからこそ」

「ふむ。それはエリアの言葉だったかな」

「モーゼではないのか？」

「しかしそれならば」

「その御子とは」

「何か起ころうとしているのか」

王はそれを聞いてどうにも複雑な顔を見せていた。

「そうだとすれば何か」

「奇跡だけではないであろう」

また誰かが言う。

「それだけでは」

「死者を生き返らせるのもまた」

「まさか」

「幾ら何でもそれは」

「まずい話じゃな」

王は死者を生き返らせるのに顔を暗くさせてきた。

「死者が生き返るとなると摂理が乱れる。それだけは」

「淫らな女よ」

「また」

王妃はヨカナーンの言葉に顔を顰めさせる。

「また言うのね」

「金色の目と瞼を持つバビロンの娘よ」

バビロンの淫婦のことである。これはヨハネの黙示録にあるが実際はヘブライを苦しめたローマを指し示していると言われている。

だがヨカナーンはこれを王妃への言葉に使っているのである。

「裁きは近いぞ。覚悟はいいな」

「あの声を黙らせなさい」

王妃はそう周りの者に黙らせる。

第二幕その四

「剣で貫き盾で押し潰すのだ」

「戯言です」

「陛下」

きつとしてまた王に顔を向けてきた。

「あの言葉を」

「そなたのことではない」

王はまた王妃を宥めてきた。

「だからな」

「いえ」

しかし王妃はそれで納得しようとしない。

「違います、ですから」

「止めさせよというのか？」

「その通りです」

声が次第に強くなってきていた。

「ですから」

「それでもものう」

王の態度は煮え切らない。

「まあ飲め」

煮え切らないまま話を変えてきた。

「葡萄酒を」

「はい」

周りの者がそれに応える。すぐに王妃に杯が持って来られる。

「ローマにおられる陛下にも乾杯しようぞ」

「ええ。しかし」

「しかし？」

またヨカナーンの話かと顔を曇らせる。

「サロメです」

「サロメが如何致した？」

「諦められて下さい」

声が峻厳なものに戻っていた。

「宜しいですね」

「しかしじゃ」

王はここでサロメの顔を見た。

「あれ程蒼ざめた顔は見たことがない」

「何故蒼ざめたからといって気にかけるのですか？」

「そなたはおかしいとは思わないのか？」

そう妻に問う。

「あの娘を見て」

「いえ」

しかし王妃の言葉は王にとって素っ気無いものであった。

「別に。それより」

「それより？」

「あの男です」

彼女の心はまたあの男に向けられた。

「見てみたいと思いませんか。あの男が言っている日を」

「どんな日だったかな」

「月が血の様に赤くなり、星が熟れた無花果の様に落ちる日です」

そう述べてきた。

「本当にそんな日が来るのかどうか」

「さてな」

またその言葉に答えようとはしない。

「わしは知らぬな」

「あの男は酔っているのです」

王妃は険のある顔でそう述べた。

「酔っ払いに過ぎません」

「神の酒だ」

王はその言葉を聞いてこう返す。

「神の酒に酔っておられるのだ」

「それは一体どんな酒なのでしょう」

王妃はその言葉に皮肉な笑みを浮かべてきた。

「私は知りませんが」

「だがあるのじゃ」

言いながら目を泳がせる。

「あの方はそれを常に飲まれておられるのだ」

またサロメに目をやる。ここで彼女に対して言った。

「サロメ」

「はい」

サロメは彼の言葉に応えて顔を向けてきた。

「何でしょうか」

「踊ってくれぬか」

「踊りですか」

「そうじゃ、そなたの舞を見てみたくなったのじゃ」

そうサロメに声をかける。その目はやはり妙な熱を帯びていた。

「どうじゃ？今ここで」

「氣が乗りませぬ」

サロメは畏まってそう述べた。

「申し訳ありませんが」

「そう言わずにだ」

「サロメも嫌がっているではありませんか」

王妃が横から入ってきた。

「ですから」

「しかしじゃ」

それでも王はサロメに対する執心を見せる。

「宴の余興にな」

「おかしいな」

ナラボートがそれを見て彼の側にいるあの二人の兵士達に声をかけた。

「陛下の御様子は」

「ナラボート殿もそう思われますか」

「我々もです」

二人の兵士も怪訝な顔で彼に応える。

「やはりこれは」

「不吉なものが」

「そうだな。陛下といい王女様といい」

「恐ろしいことが」

「蛆に食われるべき悪徳」

またしてもヨカナーンの声が聞こえてきた。

「その悪徳を犯した者が紫と緋色の衣を着て玉座につく」

「貴方のことですね」

王妃がその言葉を聞いて王に囁いてきた。

第二幕その五

「これは」

「いや」

しかし王はそれを否定する。そこにまたヨカーナンの声がする。

「その手に神を冒瀆する黄金色の杯を持つて」

「むっ」

ここで自分の杯を見る。その黄金の杯だ。

「それにより裁かれる。主の天使に打ち砕かれ」

「御聞きになられましたね」

また王妃が言ってきた。

「貴方を中傷しています」

「いや、あれはわしのことではない」

王はまたしても王妃の言葉を否定した。

「あれはわしの敵であるカパドシアの王のことだ」

「あの王の」

「そうじゃ」

こう強弁してきた。カパドキアとはヘブライの隣にある国であり彼等とは敵対していた。ヘロデ王はローマ皇帝に頼んで彼を罰してくれるようしてもらっているところなのだ。

「ローマ皇帝が裁かれる」

彼はこう述べる。

「あの男はな。そのことじゃ」

「そうでしょうか」

「そうじゃ」

またしても強弁する。

「陛下はあの者をローマに呼び出すということじゃ。おそらく裁きを受けるであろうな」

「そうであれば宜しいですが」

王妃はシニカルに返した。

「カルタゴみたいにならないことを祈りますわ
「戯言を」

カルタゴはかつてローマと三度争った。最後の戦いの前はローマにとつて最も忠実な都市となっていた。だがその経済的發展を見た大カトーの演説によりローマに警戒され遂にはローマに滅ぼされたのである。カルタゴの悲劇は他の者達にとつては他人事ではない。かつてカルタゴのあった場所はもう何もないのだから。カルタゴ人は多くは殺され残りは奴隷となった。街は跡形もなく消されているのだ。

ローマは脅威を滅ぼすのに手段を選ばない。王はそれを知っている。しかしあえて見ようとはしていないだけなのだ。それ程までにローマを恐れていたのだ。

「そんなことがあるう筈がない」

「だいいいですがね」

しかし王妃の言葉の調子は相変わらずであつた。王は不快なままであつた。

「そのローマの方をもてなす為にも」

話を強引に摩り替えてきた。

「サロメよ、舞ってくれぬか」

「しかし」

「どうしてもじゃ」

彼は言う。

「望みのものは何でも取らそう」

「今の私に望みのものなぞ」

だがここで。またしてもヨカナンが言ったのだ。

「聞くのだ」

「ヨカナン」

さつきから聞こえていたあの言葉がまた。その言葉が今彼女の心に宿った。

「御子と裁きが来られる足音を。だからこそ」

「陛下」

彼女はその言葉を耳にすると急に王に顔を向けてきた。

「どうしたのじゃ？」

「何を下さるのでしょうか」

「何でもじゃ」

王は彼の権威を以ってそう答えた。

「そなたの欲しいものはな」

「何でもですね」

「うむ」

満面に笑みを浮かべて答える。遂に受けてくれたかと思ったからだ。

「何でもな。領土の半分でもよいぞ」

「まずいな」

「ああ」

兵士達は王のこの軽率な約束にまた不吉なものを感じた。

「このままでは」

「しかし我等ではもう」

この流れを止められない。それは感じていた。

不吉な空気が退廃した宴の中に漂う。しかしそれに気付いている者は僅かであった。

第二幕その六

ナラボートも何も言えない。彼は友人達に言うだけであつた。

「見守るしかないか」

「ですね」

「残念ながら」

サロメは立ち上がった。優美な姿で王に問う。

「では陛下」

「うむ」

「お止めなさい」

王妃が娘に言ってきた。

「踊るのは」

「まあいいではないか」

しかし王がそれを止める。

「サロメが踊ると申しているのじゃぞ。邪魔をしてはならぬ」

「何と都合のいい」

「世の中とはそうしたものじゃ」

しれつとして返す。

「何事もな。機会があれば乗る」

彼のやり方であつた。丁度今がその時だっただけなのだ。

「よいのですね」

サロメはまた王に問うた。

「何でも下さると」

「誓おう」

またしても軽々しく返した。彼女の真意を知らずに。

「何でもな」

「わかりました」

サロメはその言葉を聞き微笑んだ。その笑みは妖しく、闇の中に舞う蝶のようであつた。

「誓われましたね」

「今な」

またそれを認めた。

「誓ったぞ。これでよいのだな」

「はい」

にこりと笑って頷く。これで決まりであった。

「わかりました。それでは」

「そなたの舞が見られるのならな」

王はまだ氣付いてはいなかった。

「何でもやるぞ」

「本当ですね」

「わしも王じゃ」

はつきり言ってきた。

「言ったことは守る」

「よいですね」

「よい」

断言した。この時は迷いはなかった。

「わかったな」

「わかりました」

サロメはその言葉に妖しく微笑む。

「それでは」

「サロメ」

王妃が彼女を咎めてきた。

「止めておくのじゃ」

「いえ」

しかしサロメは急に母に対して聞き分けのない様子になっていた。

「踊ります」

「うむ。しかし」

王も何かに氣付いた。

「妙じゃのう。胸騒ぎがしてきたぞ」

「胸騒ぎ」

王妃が王のその言葉に顔を向けてきた、

「そうじゃ。これはな」

「これは」

「黒い鳥の羽ばたきじゃな。これは」

「まさか」

「いや、見えるし聞こえる」

王はそう応える。

「そんな筈がないのに。どういふことなのじゃ？これは」

「気のせいでありましょう」

「気のせいではない」

王妃のその言葉を否定した。

「これは確かに」

「そうでしょうか」

「身を切るような風・・・冷たい、いや」

感覚が狂っている。それもわかった。

「熱い。どうしれじゃ」

「陛下」

そこにナラボートがずっと進み出てきた。

「ナラボート」

「これを」

一輪の赤い花を差し出してきた。

「花か」

「はい、どうでしょうか」

「済まぬな。じゃが」

「何か」

「やけに赤いのう。どうしてそこまで赤いのじゃ？」

「御気に召されませんか？」

「いや、そうではない」

それは一旦は否定する。

「そうではないが」

「何か」

「美しいが血のように赤いな」
花を見て告げる。

「何か印象に残る。嫌にな」

「それでは」

「いや、もらおう」

ナラボートの申し出を受けることにした。

「よいか」

「はい、それでは」

花を受け取る。無理をして機嫌のいい顔を見せてきた。

「見るもの全てに象徴を見つけるのみな」

王はこうも言った。

「よくはないな」

「御言葉ですが」

ナラボートは申し出てきた。

第二幕その七

「それは」

「違うのはわかつている。どうにもな」

花を受け取りながら述べる。

「済まぬ。明るい席じゃな」

「はい」

「ではサロメよ」

あらためてサロメに目をやる。

「よいな」

「はい。それでは」

畏まって一礼する。そうして応える。

「準備を」

「うむ、わしとて王だ」

その誇りはあつた。

「カパドシアのあの王は嘯いてばかりおるがわしは違う。何がある
うとも自分の言葉の奴隷となり約束は守るぞ」

これだけは事実であつた。彼も王としての誇りがあるのだ。

「では行くがいい」

そうサロメに告げる。

「すぐにな」

「わかりました」

サロメはそれに頷く。静かだが妖しい笑顔で姿を消すのであつた。
一旦は姿を消したサロメ。しかし王の不吉な気持ちには変わらなかつた。

「まだ何か」

「やはり妙じゃ」

王妃に答える。

「この感触。胸騒ぎが止まらぬ」

「ではどうぞ」

杯を差し出してきた。

「飲まれれば変わります」

「気分転換をせよと申すのか」

「何を困らせることがあります？」

そう王に問う。

「不安なものは何もないというのに」

「いや」

しかしその言葉に首を横に振る。

「あれを見よ」

そう述べて窓を見やる。

「赤い月じゃ。おかしいとは思わぬか？」

「さて」

「先程まで白かったというのにじゃ」

しかしこれは違っていた。赤い月に見えているのは王だけである。他の者達は皆白い月に見えていたのである。それが違っていったのだ。

「あの赤い月を見ているとどうにもな」

「御気にされ過ぎなだけです」

「そなたは何も見ても同じじゃな」

思わずそう呟いた。

「困ったことじゃ」

「困ったことにはならぬでしょう」

王妃はうつすらと笑みを浮かべてきた。

「あの男がここにいるのよりは遥かにましです」

「またそれが」

その言葉に顔を苦くさせる。

「どうしてもか」

「どうしてもです。何があるうとも」

「諦めよ」

王はそう告げた。

「気にせずにな」

「それは陛下もです」

またしてもサロメのことに言葉を及ばせてきた。

「おわかりですか？」

「わからぬな」

無然とした顔でとぼける。

「どうにも」

「陛下」

しかしここで従者がやって来て王に告げてきた。

「王女様の御用意ができました」

「おお、いよいよか」

その言葉に顔を綻ばせる。しかし。

「いや」

急にその綻んだ顔を暗くさせてきた。

「待て」

「どう為されました？」

「いやな」

自分だけに聞こえるような言葉で呟いた。

「どうにも。やはり」

述べながら手にしている酒を飲む。

「どうするべきか」

「御義父上」

しかしそこにサロメがやって来た。素足で身体の上に七枚のヴェールをまとっている。

第二幕その八

「サロメか」

「はい」

サロメはヴェールの向こうで妖しく笑っていた。

「宜しいですね」

「うむ」

難しい顔をして答える。

「では踊るがいい。いいな」

「わかりました。それでは」

「音楽を奏でよ」

王は躊躇いながらもそう周りの者に命じた。

「そして場を開けよ。よいな」

「はっ」

「わかりました」

周りの者がそれに答える。そして今サロメの舞がはじまった。

煽情的な曲の中でサロメは舞いはじめた。小柄で細い身体を舞わせている。

踊りながら時として身体を寝かせ起き上がらせ。その中で一枚一枚ヴェールを脱いでいく。脱ぎながらその身体を露わにしていく。現われるその身体は華奢で柳のように細いが絹よりも細かった。その身体で舞っていく。

また一枚、そして一枚。ヴェールを脱ぐ度にその身体が見えていく。そして最後の曲が終わった時には。その白い身体を全て見せていたのであった。

「うっむ」

王はその姿を見て唸る。

「素晴らしい。見事な舞であったぞ」

そうサロメに告げる。

「有り難き御言葉」

サロメは周りの者に一枚のヴェールをかけられていた。それを羽織ながら王に応える。

「では褒美を取らそう」

言ったところでサロメの目を見た。見れば何か恐ろしい欲望を抱いているように見えた。

それに怯む。しかし王としての約束が彼を動かす。彼は問うたのであった。

「何じゃ？」

「まずは銀の大皿を」

「皿をか」

「はい」

畏まって答えてきた。

「まずはそれを頂きとうございます」

「わかった。ではまずはそれじゃな」

「ええ」

「よし、皿じゃ」

王はそれを受けて周りの者達に言い伝える。

「銀の大皿を。一つ持って参れ」

「わかりました」

周りの者達はそれに応える。そして暫くして皿を持って来たのであった。

「これで御座いますね」

「これじゃな、サロメ」

「そうです」

皿を見て何故かうつとりと笑う。王はそれも見たがやはり胸騒ぎが増すばかりで収まりはしない。

「それで御座います」

「わかった。では次は何じゃ」

王はまたサロメに問うた。

「申してみよ。どんな馳走が欲しいのじゃ？」

「首を」

「首じゃと」

「左様でございます」

サロメは述べる。

「それを頂きとうございます」

「わからぬな」

王はその言葉に首を傾げる。何が何なのかわらないといった顔であつた。

「首とは」

「ヨカナーンの首を」

「何っ」

その言葉に思わず言葉を失つた。

「今何と申した」

「ヨカナーンの首を」

妖しく笑つてまた述べる。

「是非共」

「ならぬ」

王は血相を変えて言う。

「それだけは」

「いえ、陛下」

しかしそこで王妃が横から言うのであつた。

「よいではありませんか。サロメ」

にこやかな声で娘に対して述べる。

「よくぞ申した。何というよい娘じゃ」

「そなたがそそのかしたのか」

王妃をきつと見据えて問う。

「そなたが」

「母上の御言葉ではありません」

サロメは立ち上がつてそう王に返す。その顔も身体も毅然とした

ものと妖しいものがある。その二つに魔性を漂わせていた。

「あくまで私の楽しみの方に」

「馬鹿な」

王はその言葉を遮ろうとする。

「何故だ。何故ヨカナーンの首を」

「誓ったではありませんか」

「確かにそうじゃ」

それは王も認める。

「しかしじゃ。それでも」

王はそれを何とか否定しようとする。

「他のものでは」

「何故拒まれるのですか？」

王妃は王のその言葉を阻もうとする。

「誓われたではありませんか」

「それでもじゃ」

王はそれでも言う。

「それだけはならん。何があってもじゃ」

「また無粋な」

「違う」

その顔には王としての威厳はなかった。ただひたすらそのことを拒もうとする、そうした顔であった。

第二幕その九

「他のものではどうじゃ？」

その必死の顔でサロメに対して言う。

「男の首なぞ何になろうか」

「いえ」

「エメラルドではどうじゃ」

拒むサロメにカードを出してきた。

「ローマ皇帝より頂いたものじゃ。眩く翠に輝く美しいエメラルドをやるう。それでどうじゃ？」

「そのようなものはいりませぬ」

サロメはそれも拒む。

「では孔雀でどうじゃ」

次のカードを出してきた。

「白い身体と黄金色の嘴、そして紫の脚を持っておる。その白い孔雀をどうじゃ」

「いえ」

だがそれも拒む。

「ヨカナーンの首を」

またサロメは言った。

「それを」

「それではのう」

慌ててまたカードを切り出してきた。

「銀の糸でつなぎ黄金の網にかけられた真珠のネックレスじゃ。どうじゃ？」

「そんなものには何の価値もありませぬ」

やはりサロメはそれも否定する。

「ヨカナーンの首を」

「アメジストはどうじゃ？それともトルコ石か」

必死に自分が持っている宝物を出す。しかしそれは何の効果もなかった。

サロメの言葉は変わらない。あくまでヨカナンの首を願うのであった。王はいよいよ持っている豊富なカードをなくしてきた。

「王位をやるうか」

「何とつ」

「陛下、それは」

周りの者もこれには言葉を失う。

「それだけはなりませぬ」

「許されぬことです」

ヘブライでは女は蔑まされている。その女が王になるということ考えられないことだ。それをあえて言ったところに王の苦しみがあつた。

「それをやるう。だからこそ」

「王位もいりませぬ」

「おやおや」

王妃は遂に最後のカードが失われたのを見てまた笑う。

「これはこれは」

「私が欲しいのはただ一つです」

そして言うのであった。

「ヨカナンの首を」

「他には何もいらぬか」

「いりませぬ」

その言葉も定まっていた。

「ですから」

「わかった」

項垂れた顔で述べた。

「それをやるう。よいのだな」

「有り難き幸せ」

目を細めて笑う。

「それではすぐに」

「わかりました」

側に控えていた一人である大柄な男がそれに応えた。

「それでは」

「うむ」

王は沈んだ顔で答える。

「頼むぞ」

「はい」

男は巨大な剣を兵士達から受け取り強張った顔で宴の場を後にした。その後ろを従者達が銀の大皿を手について行くのであった。

「もうすぐね」

サロメは彼等を見て目を細めるのであった。その細まった目には黒く妖しい光があった。まるで蝶を誘い込むかのような光であった。黒いだけでなく紫苑の色もそこにあった。

「ヨカナーンが私のところへ」

ここで何かが落ちる音がした。

「落ちたわね」

「落ちたか」

サロメと王は同時に声をあげた。

「ヨカナーンの首が」

「恐ろしい罪じゃ」

サロメは勝ち誇った笑みを浮かべ王は沈んでいる。その顔でそれぞれ言ったのであった。

第二幕その十

「そなたのせいじゃ」

王は王妃の顔を見て述べた。

「そなたのせいで娘は」

「よく御覧下さい」

王妃は狼狽しきつた王に対して返す。

「あれこそはサロメの願い。違いますか？」

「違うというのか」

「そうです」

王妃は述べる。

「娘の顔を」

見ればその顔はそれまでのサロメの顔とは異なっていた。少女の顔から女の顔になってしまっていたのだ。

「これでよいのです」

そこに男と従者が戻って来た。従者の手には大皿がある。そして上にはヨカナーンの首が。

銀の皿に赤い血が滴り蒼白となったヨカナーンの首がある。目を閉じ何も語らない。何も見ずにそこにあった。

「来たわね」

サロメはヨカナーンの首を見て述べた。

「やっと私のところに」

その首がある皿を手を持っている。皿上のヨカナーンの首を見て妖しく笑う。

「口付けをしてあげるわ」

だがヨカナーンは何も語らない。黙って目を閉じているだけである。

「けれど私を見ないのね。それは何故？」

しかしそれでもヨカナーンは語らない。サロメはそんな彼にまた

言うのだった。

「けれども貴方は私の手の中にあるわ。決して離れはしない」
恍惚とした声であった。その声で述べ続ける。

「それだけでいいのかも知れないわ。けれど」

彼女はさらに言う。

「私は貴方だけがいればいいのよ。それだけで」

「何と恐ろしい話じゃ」

王はヨカナンの首をその両手に持って笑みを浮かべるサロメを見て言う。

「これが罪でなくて何と言うのじゃ」

「さて」

しかし王妃はそれを見ても平気である。

「してどうされるのですか？」

「どうせよとは」

「殺されますか？」

王に問うてきた。

「私もサロメも」

「殺せたら既にそうしておる」

彼は忌々しげにそう返した。

「既にな」

「ではそうなさいませ」

笑いながら王妃はまた言った。

「私共を」

「勝手にせい。しかし」

王は言う。

「わしも御前も裁きを受ける。それは覚悟しておけ」

「裁きなぞ今更」

正面を見て妖艶に笑っていた。サロメとはまた違った魔性の美であった。かつて彼はこの美に誘われ兄王を殺しその玉座を奪った。今その罪を思い出していた。

「何になりましたか。人は全て罪を犯すものではないですか」

「構わぬと申すのだな」

「左様です」

王妃は平然と述べる。

「愉しみの末に裁きを受けるのなら喜んで」

「では好きにせよ。わしは去る」

「何処へ？」

「何処でもよい」

立ち上がってそう言い捨てた。

「だがここへは二度とは来ぬ」

「好きになさいませ」

王妃はまた冷たい言葉をかけた。王を見ようとはしない。

「ですが」

「まだ言うのか」

「隠しても全ては残っております。それはお忘れなきよう」

「くっ」

王は何も言えなかった。そのまま部屋を後にする。

他の者もそれに続き灯りが消えていく。ナラボートも兵士達もそれを見ていたがやがて王に続いた。後に残るは王妃とサロメだけであつた。

「サロメ」

王妃は暗くなつた部屋の王妃の座で一人座つてサロメを見ていた。

「そなたは女になつた。それを覚えておくのじゃ」

彼女はその言葉を聞いてはいなかった。ただヨカナンの首をその手に抱いて笑っているだけであつた。その笑みは狂気の笑みであつた。しかしそれと共にこの世のものとは思えぬ美を映し出していたのであつた。

サロメ 完

8

2
0
0
7
.
3
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269f/>

サロメ

2011年4月28日00時41分発行